

夏・冬

座る場所がなくなった僕は強い陽射しを背に
珍しくスカート姿の君を見下ろして
所在無さそうに立ったまま窓に寄りかかる

「明治時代の格好だって、お母さんが」
そんなお母さんは見ず知らずの僕に向って
「怠け者の節句働き」と君のことをからかう人

夏と冬の記憶がひとつに落け合う
ちっとも不自然にならないのはきっと
そこにいつも誰かの笑顔が暖かかったせい

思い出をたどることが敗北だなんて
そんな昔の僕は、きっと怖れのかたまり

思い出は今――、思い出は^{いま}現在・・・

(1984.11.2)